

小論文とはなんだろう

「大学入試のありかたを見直そう」という議論の中で、ペーパーテストへの偏りをあらため、調査書や面接、そして小論文を重視しよう」ということがずっと言われ続けています。

これからの社会に必要な人材として、自分以外の他者との協同作業を有効に行える資質の重要性が叫ばれており、その資質を養成したり、どこまで備わっているかを判定したりするには、小論文を書かせるのが効果的だと考えられているからです。

そこで最初に、小論文とは何かについて考えてみましょう。

小論文を説明するときによく取り上げられるのは、作文との違いは何か、ということなのです。

1 作文と小論文の違い

みなさんは中学生のときに、『修学旅行の思い出』とか『将来の夢』といったタイトルで作文を書いたことがあると思います。ここでは「友だちと夜おそくまで部屋の中で語り合うことができて楽しかった」とか、「大学を卒業したら宇宙飛行士になって、月面を歩いてみたい」などと書いていたかもしれません。

そこから考えると、「作文」は次のような文章といえるでしょう。

Point

作文——感じたり思ったりしたことを、そのまま書きあらわした文章

〈自分自身にかかわることがらや自分の周囲で起きた出来事などについて、印象に残るような表現を用いて書く〉というのが、作文の基本的なスタイルだったはずなのです。

それに対して「小論文」は、「小」なりといえども「論文」です。「論文」とは、「論理的文章」「筋道だった文章」のことをいい、「論理」とは〈議論や思考を進める道筋・論法〉のことです。

もちろん、専門家の学術論文のような長大な論文を書くわけではありませんが、「問われていること」を意識し、その「問い」を少しずつ掘り下げながら自分の主張（結論）を導くという基本的な態度は、どちらにも共通するものです。

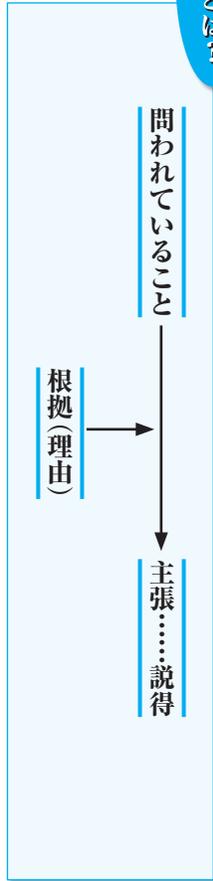
つまり、「小論文」は次のような文章といえます。

Point

小論文——問われていることに対して、「私はこのように考える」と主張し、さらに、「なぜそのように考えるのか」という理由（根拠）を説明することによって、読み手を説得することを目的とした文章

説明が少し長くなりましたので、これを簡単な図にしてみましょう。

小論文とは？



ここには、次の四つの要素が示されていることに注意してください。

Point

小論文の四つの要素＝「問い（論点）」「主張（主題）」「根拠（理由）」「説得」

本テキストでは、小論文の課題の中で「問われていること」を「**論点**」と呼びます。

その問いに沿って導き出された「何をどう考えるのか」という具体的な論述のテーマを「**主題**」と呼び、この「**主題**」が他者に向かって発せられたものを「**主張**」と呼びます。

たとえば、「将来の大学はどうあるべきか」「人類はどのような方向に進むべきか」といった問いが「**論点**」に当たります。この、「人類はどのような方向に進むべきか」という論点からは、「人口爆発への懸念」「食料不足への対策」「核管理の重要性」といったさまざまな「**主題**」を導くことができ、その主題を相手に対して「核技術の国家単位での管理は禁止し、全人類の共同管理下におくべきである」などと訴えれば、「**主張**」となります。

また、「論証に必要な根拠（理由）」を「**論拠**」といいますので、以下では原則的にこの用語を使います。

「**論点・主張・論拠・説得**」の四つはいずれも大切です。小論文を書くときには常に意識するようにしましょう。

2 小論文の目的は説得すること

小論文の最終的な目的は、読み手を説得することです。

ただし、ここでいう「説得」とは、「読み手を説きふせて、書き手の主張にしたがってもらう」ことではありません。

もちろん、それくらいたくましい主張をうちだせれば素晴らしいのですが、ふつうはなかなかそう簡単にはいきません。なぜなら、読み手にも自分なりの考えがあるからです。原稿用紙にしてわずか二枚くらいの文章で読み手の考えを変えてしまおうのは、非常に難しいことです。

小論文という「説得」とは、次のようにとらえるべきものです。

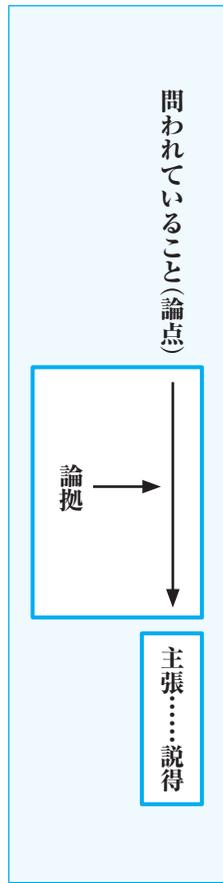
Point

説得——書き手の示す考え方（主張とその論拠）が十分になりたつと、読み手に認めてもらうこと

そもそも小論文で問われるのは、私たちの社会の中で解決の方法がなかなか見あたらなかったり、人によってさまざまに主張が分かれたりしてしまうような難しい問題であるのが普通です。

したがって、小論文を出題する側は、書き手に対して、そうした問題に対する〈正しい解答〉を期待しているわけではありません。

もちろん主張の中身は大切ですが、それと同時に、小論文では主張を導くまでのプロセスが非常に大切であるということを知っておきましょう。



線で囲んだ部分に注目しましょう。小論文で大切なのは、**どれほど説得力のある論拠をもって主張を示すことができるか**、ということなのです。

どんなに立派なことを主張しても、その主張をうちだすまでの途中の過程が不十分であれば、その答案には説得力がない（つまり、高い評価にはつながらない）ことになります。

小論文と向きあう際は、「自分の思うとおりに書けばよい」といった、これまでの作文を書くときのような態度ではなく、「自分の主張を認めてもらおう」という強い意欲をもって取り組むようにしましょう。

要点 【小論文】

差異に目を向ける

テーマを学ぶ意義

■ 違いを見抜くことこそ、理解するということ

「差異」とは、二つ以上のものを比べたときの、違いや隔たりを意味する。そして、「違いに目を向ける」ことは、実はその対象を（理解しようとする・わかろうとする）ことにほかならない。

ところで、「わかる」という言葉は、「わかる」と語源が同じである。

これらには一般的に「分かる・分ける」などと漢字が当てられるが、「分」という漢字は〈刀で二つに分ける〉ことを意味する。また「わかる」は、常用漢字表外の読みだが、「判る」とも書かれる。「判」の旁の

「刀」は〈立刀〉で、これも〈刀で切り分ける〉という意味である。さらに、これも常用外で「解る」とも書くが、「解」は「角・刀・牛」で構成されており、〈刀で牛の角を切り分ける〉が原義である。

何かをでたために切り分けるのならばともかく、きちんと意味のある分け方をするためには、対象の違い（差異）をしっかり見抜くことが大切である。

到達目標

■ 差異を見抜くことの重要性を認識する。

テーマ学習

例題

「大人」と「子ども」の間の境界線の引き方はさまざまです。たとえば、成人年齢など、一定の年齢を規準とする考え方もあれば、経済的な自立など、一定のことが自分でできるようになることを基準とする考え方もあります。

あなたは、「大人」と「子ども」の間の境界線を、どのような基準によって引くのが望ましいと考えますか。四〇〇字以内で述べなさい。

(二〇一七年 新潟大学法学部 改題)

今回の設問文は、形式的にはテーマ型の問題である。最初に、問題の要求を確認しておこう。

- ・ 「大人」と「子ども」の間の境界線をどのように引くのが望ましいかについてのあなたの考えを述べる。
- ・ 四〇〇字以内で述べる。

これらの条件を落とさないように気をつけながら、以下の順で解答の導き方を考えていこう。

学習時間
30分

※例題に取り
組む場合は
60分

ステップ1 差異について考える

例題そのものに取り組む前に、今回のテーマである「差異に目を向ける」ことについて少し考えてみよう。

「差異」とは、〈あるものが、ほかのものと異なる、比べてみて同一ではない点〉のことである。

たとえば、「人間」と「他の動物」との「差異」は、〈理性または言葉をもつかどうか〉などとされ、そこから「人間は、言語をもつ動物である」と定義されることがある。

また、人間の「個人」あるいは「集団」の間にも、〈性差、年齢差、文化差、民族差〉などさまざまな「差異」があり、そうした差異が生じる原因としては、〈身体的な特性〉〈遺伝的な条件〉〈発達段階〉〈学習や経験などの後天的条件〉〈性格（パーソナリティ）〉〈家庭などの社会条件〉〈気候・風土などの環境条件〉など、非常に多くの要因が考えられる。

しかしながら、実際に差異をとらえることは、それほど明確でも容易なことでもない。そのことを、次のいくつかの具体例を通して考えてみよう。

《例1 動物の分類》

高知県民謡「よさこい節」の一節に「潮吹く魚が泳ぎより」とあるように、かつてクジラは魚だと考えられていた。また、コウモリは古来、鳥と同類に扱われてきた。〈水中をヒレで泳ぎながら生活する〉という点ではクジラは魚と同じであり、〈空を翼で自由に飛びまわる〉という点ではコウモリは鳥と同じだからである。これらをあえて分類する必要は、当時の生活の中には特になかったはずである。

それが、近代になってさまざまな自然科学が発展し、中でも各種動物の解剖学的な差異が発見されて分類学が飛躍的に発展した結果、クジラもコウモリも哺乳類に分類されるようになった。

しかし、実際の生活において、クジラとコウモリが同じ哺乳類に属することを知っているメリットは何だろうか。昔の分類でも特に支障はないのではなからうか。むしろ実質的には、そのようなシンプルな分類のほうが便利なこともあるかもしれない。

また、〈日本語と英語では「蝶」と「蛾」を区別するが、フランス語・ドイツ語・ロシア語では通常は区別せず、「蛾」を特に区別する必要があるときには、「夜の」といった修飾語をつける〉、という話もある。

言語によってこうした差が生じる原因は何だろうか。あるいは、「蝶」と「蛾」を区別する人々は、区別しない人々よりも、知的で文化的などといえるのだろうか。

《例2 虹の色》

次に、〈虹は何色か〉という問題について考えてみる。

現在の日本では一般的に「七色（赤・橙・黄・緑・青・藍・紫）」とされる虹の色だが、物理学的にいえば、太陽光のスペクトルは連続していて分けられないので、虹の色数は「無限」とするのが正しい。人によつては七色より少なく見えるだろうし、七色よりも多く識別できる人もいるはずだ。

したがって、虹の色を何色とするかは、地域や民族・時代により異なる。

日本でも古くは「五色・六色・八色」などと認識された。

現在のイギリスやフランスは日本と同様に「七色」だが、アメリカやドイツでは、一般的には「六色（赤・橙・黄・緑・青・紫）」が優勢という。

そもそも、「七色」とするのは、十七〜十八世紀に活躍したイギリスの自然科学者、アイザック・ニュートンの研究に由来するという。当時のイギリスでは、虹の基本色は「五色（赤・黄・緑・青・紫）」と考えられていたが、ニュートンはそこに橙色と藍色を加えて「七色」としたのである。

彼は、虹の色が連続していて分けられないことを知っていた。しかし、当時は音楽のオクターブが七音からなるとされていたように、「七」が神聖な数と考えられていたため、虹を「七色」に想定したといわれている。

このように虹の色は、客観的に「何色に見えるか」という科学の問題ではなく、「何色と見るか」という主観的な文化の問題である。

《例3 言語の分類》

現在、世界に存在する言語の数は数千と言われるが、似てはいるが同じではない言語（たとえば方言）を正確に区別することが原理的に難しいため、言語を厳密に分類することはほぼ不可能である。

たとえば、スペイン語とポルトガル語、あるいはタイ語とラオス語などは、各者ともにそれぞれ独立した正書法と、それを支える国家の後ろ盾がある別の言語として、社会的・政治的には分類されている。しかし、それぞれの実質的な違いは東京方言と関西方言程度のものであり、言語学的にいえば同一言語の地域変種でしかない。

以上のように、「差異」の問題はいろいろなところにあり、それらに向き合うことから逃れることはできない。しかし同時に、こうした差異は絶対的なものではない。その差が大きいと思えば大きなものになるし、小さなものだと考えれば、小さな差でしかないのである。

ステップ2 設問の意図を読み取る

さて、ここからは例題に即して考えていこう。
「大人」と「子ども」は対義語とされるが、その境界を決めることも、実は簡単ではない。

設問文にもあるように、「一定の年齢」を規準に分ける考え方が現代では一般的だが、「経済的な自立」のように「一定のことが自分でき」能力を目安にする考え方もある。その他にも、国や民族、宗教などによって、分け方や分ける年齢はさまざまである。

こうした現実を踏まえながら、「大人」と「子ども」の差異がどこにあるのかに目を向けて、自分なりに考えることを出題者は求めている。どのような分け方をして、メリットとデメリットはあり、唯一の最善解はないが、あなた自身は何を最善と考えるかが問われている。

また、みなさんは、今現在の自分を、「大人」だと思っているだろうか、それとも「子ども」だと思っているのだろうか。あなた自身が「大人」と「子ども」の境界線を考えることは、自分が自立した大人になるために必要なものは何かを考える、重要なきっかけになるはずである。だからこれは、その自覚を得るための出題であるともいえる。

「大人」と「子ども」の端境期はぎかいきにいるみなさんだからこそ、このような出題がされるのだと考えてほしい。



設問に取り組む前に、設問の条件を正確に把握し、設問の意図をしっかりと見抜いておく。

ステップ3 「大人」について考える

まず、「大人」の辞書的な意味を改めて確認しておこう。

大人…十分に成長した人、成人。考え方や態度が十分に成熟していること。思慮分別があること。

多くの社会において一般的に、〈身体的・精神的に十分に成熟している状態〉を「大人」とすることが多い。その具体的な内容は、〈身体的成熟〉については〈子を作れるかどうか〉、〈精神的成熟〉については、設問文にもあるように〈経済的に自立しているかどうか（自分の生活費を自分の労働で獲得し、自力で生活できるかどうか）〉によって判断されることが多い。

ただ、このような一定の能力を基準とする境界線は、個人の特性によって変動しやすく、国家からすると人々を統治する際に不便である。そのため、一定の基準で大人と子どもを一律に切り分けるための「成人年齢（成年）」というものが、多くの国で決められている。

成人年齢は、国際連合の「児童の権利に関する条約」で「満十八歳」と一応は決められているものの、実際には各国ごとに異なり、また同じ国の中でも、保護者の保護監督義務の期間、若年層の雇用機会、選挙権を付与される年齢、徴兵年齢などを反映して、引き上げられたり引き

下げられたりする。

たとえば、戦争状態を想定せざるを得ない国々、特にアジア・アフリカ諸国においては、徴兵時期を早めるために引き下げられやすいという説もある。また、早く成人として労働人口に取り込むことで、税収源とすることも期待できる。

日本でも、古代から明治の初年にかけては、慣例的に十五歳程度を成年としていたが、それは各家庭や共同体の中で個々に判断されるものであって、公的に一律に定められたものではなかった。

このように、成人年齢にはさまざまな要素が絡んでいる。

ステップ4 「子ども」について考える

「子ども」は、「大人」の反対概念と考えればよいが、「大人」の項目で述べなかったことを中心に、さらに考察しよう。

「子ども」についても、まず辞書的な意味を確認する。

子ども…親に対する子。幼い者。年齢のいかなる者。児童。

日本で「児童」というと、一般的には〈小学生までの子ども〉を指すが、先ほど触れた国連の「児童の権利に関する条約」第一条では、「児童とは、十八歳未満のすべての者をいう。ただし、当該児童で、その者に適用される法律により早く成年に達したものを除く」と定めている。つまり、その国の法律で十八歳の誕生日よりも前に成年に達する場合を除き、十八歳の誕生日を迎えるまでのすべての者を「児童」というのである。

「大人」の定義と同様に、何を基準として「児童」「子ども」を定義するかはさまざまである。

実は、「子ども」というのは近代以降に作られた概念であり、それ以前には「大人」と「子ども」をはっきりと区別する発想は希薄で、あるのは「小さな大人」という概念だけだった、という説がある。

「子どもの発見者」と呼ばれるフランスの哲学者ジャン・ジャック・ルソーは、著書『エミール』（一七六二年）の中で、子どもを「小さな大人」として扱うことを批判し、誕生から十二、三歳までの〈子ども時代〉は、〈能力と器官が内部的に発達する段階〉であるとした。そしてその段階では、発達した能力や器官を利用する方法を教える教育は逆効果であり、能力と器官をさらに伸ばして完成させるような教育をしなければならぬ、と主張した。

こうした思想の発展に沿って十八世紀頃から徐々に、「子ども」とは、庇護し、愛情を傾け、学校での教育を施すべき存在である」という認識が社会に形成されていったという。

つまり、「大人」「子ども」といった分類はそれほど古いものではなく、もちろん絶対的なものでもないということである。

ところで、「成年（成人年齢）」にまだ達しない者のことを「未成年者」という。

未成年者は法的に、法定代理人（親権者あるいは未成年後見人）の親権に服する義務を負う。また、「未成年者飲酒禁止法」や「未成年者喫煙禁止法」によって飲酒や喫煙の権利が制限されているし、医師・歯科医師、薬剤師、司法書士、行政書士、社会保険労務士等の各種の国家資格の取得においても、その権利が制限されている。さらに、遺言の証人または立会人となることもできない。

未成年者の刑事事件については「少年法」で、十八歳未満のときに

犯した罪で死刑に処することはできない」とされ、無期懲役等への減刑が定められている。

ステップ5 「大人と子どもの境界線の基準」を考える

以上を踏まえて、「大人」と「子ども」の間の境界線は、どのような基準によって引くのが望ましいとあなたは考えるだろうか。

もちろん、「境界線を引くことは望ましくない・境界線は必要ない」という主張もありうる。ステップ4で解説したように、「大人と子ども」の境界線は比較的新しい概念であり、境界線を引くことによるデメリット（たとえば、「子ども」という保護期間を設けることで、社会的なコスト増になる、など）も考えられるからである。

ただ、若年層は細胞の生成が速いため、傷病からの回復が速いが、ガンを発症した場合でも進行が速いので、助からない確率が高い。多くの国で、若年層の禁酒・禁煙を定めているのは、その悪影響による健康被害の大きさが経験的に知られているからだと考えてよい。

また、「境界線は必要ない」という主張が「いつまでも子どもでいたい」といった気持ちから発せられたものであるとすれば、大学生としての資質を問う入試の小論文の解答としては、不合格とならざるをえないだろう。

つまり、歴史的・世界的にこの境界線を引く制度が広く導入され、現在でもそれが維持されていることから考えると、境界線を引くデメリット以上のメリットがあると推測できる。

したがって、境界線そのものを否定する場合には、十分に理論武装してから臨む必要がある。

次に、どのような基準が望ましいのかを考える。

まず、「成人年齢など、一定の年齢を規準とする考え方」は、「年齢」という客観的な基準によって、その子の資質などは一切考えずに自動的に大人にしてしまう考え方である。

これは、ある時期がくれば誰でも大人になれるという点では平等だが、人の成長には個体差があり、特に若年層ではその差が大きい。そのため、実年齢よりも早く資質的に成長した者にとっては不満となるし、そうした人材を活用しにくいという点では、社会的なデメリットにもなる。逆に、成人としての資質がまだ不十分にも関わらず成人年齢に達してしまつた者にとっては、負担となる。

一方、「経済的な自立など、一定のことが自分でできるようになる」という基準は、その子の能力に関わるため、個人によってその時期に差が出るし、客観的な判定も難しい。

いずれにせよ、〈生物がもつ個体差の問題〉を無視できない。こうしたジレンマの中で、あなたが最善と考える対応策は何だろうか。

公式

メリットとデメリットは、多くの場合表裏一体であり、何かを得れば何かを失うが、逆に何かを失ったときには、必ず別の何かを得ているものである。冷静に比較考量しよう。

ワーク

「大人と子どもの境界線」を、どのような基準によって引くのが望ましいか、あなた自身の主張とその論拠を記してみよう。



主張
論拠

ステップ6

制限字数以内にまとめる

今回は制限字数が短いので、余計なことを書く余裕はない。

まず「境界線をどのような基準で引くのか」という主張の部分は、一〇〇字から一五〇字程度に収めるとよいだろう。

その論拠の記述には、十分な文字数をかけたい。論拠を補強する具体例を入れたほうがよいが、個人的なエピソードなどを詳しく説明すると、すぐに字数が足りなくなってしまうだろう。また、自分の主張に対する「反論」とそれに対する「再反論」も、もし入れられれば入れるとよいが、四〇〇字という制限の中ではなかなか難しいと思われる。したがって、「具体例」「反論・再反論」は、必要に応じて採用すればよく、無理に入れなくてもよい。

解答例では、「人間の成長は個人差が大きい」ことを論拠に、現在の〈年齢による区分〉に異を唱え、〈個人の成長に応じた区分〉を提唱している。その具体的な基準については、「体力・知力・精神力を、筆記試験・実地試験・面接試験などを組み合わせて総合的に判断する」とするのみで、それ以上の具体的な中身にまでは触れていないが、四〇〇字という条件であればこの程度でも問題ない。

段落は、最大でも四段落あれば十分だろう。

フレームワークに落とし込もう！

今回学習した内容を、小論文のフレームワークに落とし込む。

小論文のフレームワークの一例

《序論》

大人と子どもの境界線は必要である。

〈論拠〉 子どもの保護は人類の存続に重要だから。

《本論① 現状への批判》

年齢で一律に境界を引くことには違和感を覚える。

〈論拠〉 人間の成長は個人差が大きいから。

《本論② 自身の対案》

境界は、専門の政府機関が個人の成長を総合的に判断して、個々に決めるべきである。

〈論拠〉 若年者でも資質を十分に備えていれば大人として認定できるし、自立できない人は保護できる。

《結び》

新たな不平等の発生は想定されるが、試す価値はある。

◎ポイント 具体的な方策を示す！

成長の度合いには個体差があるため、その境界も個体によって異なるべきだとし、その個体差を埋める具体的な対処法を、〈政策による解決〉に求めたところが、この小論文のポイントである。

例題の解答例

子どもは、大人と違って身体的・精神的に弱いものであるし、その時期の個体をしっかり保護しないと、人類全体の存続を危うくしてしまう怖れがある。したがって、大人と子どもとの間には境界線が必要である。しかしその境界線を、現在のように年齢で一律に引くことに、私は違和感を覚える。人間の成長は個人差が大きいからである。

境界線は、その子の成長に応じて個々に決めるべきである。ただし、それが一部の者の恣意によって勝手に決められないように、専門の政府機関が公式に行い、その境界は、体力・知力・精神力を、筆記試験・実地試験・面接試験などを組み合わせて総合的に判断するのである。この政策をとれば、大人の資質を十分に備えている若年者には大人の仕事を任せられるようになるし、年齢に関わらず自立できない人には保護が与えられる。

もちろん、これによって新たな不平等は生まれるが、試してみる価値はあると私は思う。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

著作権の関係で表示できません。

著作権の関係で表示できません。

著作権の関係で表示できません。

著作権の関係で表示できません。

問 課題文の内容を参考にして「日本語らしい表現」をとりあげ、そこに表れている「日本人らしさ」について、あなたの考えを八〇〇字以内で論述しなさい。なお、とりあげる表現は課題文に見られるような「省略の表現」に限らなくてもよい。

(100点)

差異に目を向ける

論述のヒント

今回の学習目的は「差異に目を向ける」だが、設問には「日本語と他の言語の差異を比較して」などといった条件は明記されていない。だから、英語などの表現例をことさらにとりあげて論述する必要はない(とりあげる場合は、Englishのように横書きし、一マスに二字入れる)。

しかし、日本語のことだけを考えていたのでは、何が「日本語らしい表現」なのかわからないはずだ。日本語らしさは、日本語ではない他の言語と比較して初めてわかることだからである。したがって、今回の問題で問われているのは、(日本語と他の言語との差異に目を向ける)ことであると考えるべき。

さて、日本語と比較する(他の言語)といわれても、みなさんが知っている外国語は英語か漢文(漢文は古代中国の文語であり、りっぱな外国語である)だけの人が多いだろうから、それらとの比較でかまわない。

非英語圏で生活したことがあるとか、非英語圏出身の保護者に育てられたといった、英語以外の言語を知っている人は、その独自性を生かした論述をしたほうが、他の人の答案よりも印象的な内容が書けるはずである。ただ、その場合には、採点者がその言語のことを知らない可能性が高いので、必要に応じて最低限の説明をするほうが無難である。

「日本語らしい表現」については、設問文に「課題文にない例をとってあげて」といった注意書きはないが、課題文にない例を自分で考えてとりあげたほうが評価が高くなるだろう。

課題文には、単語レベルの例「ぼつぼつ」「そろそろ」、慣用表現レベルの例「はじめてお目にかかります」「私、知らないんです」「田中ですけども」などのほか、語法・文法レベル、発想レベルでの幅広い例示がある。答案でも、どのレベルの例をとってあげてもよい。

どうしても思いつかない場合には、課題文の例を使うしかないが、その場合も性質の近い別の言葉にできるだけ改変する努力はしたい。

構成のヒント

まず、「日本語らしい表現」の例を挙げてから、そこからかがえる「日本人らしさ」を述べるのが定石である。今回は、多くの人にとって母語である日本語がテーマなので、特に(自分自身という個人)に関わる具体例でなくても、十分な論証となるはずである(もちろん、自分個人の体験から何か独自の論拠を述べてもよい)。

・私は……という表現に、日本人らしさを感じる。

・自分がそのように感じるのは、……と考えるからである。

という形で全体の大枠をとらえるとよいだろう。

問題

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

著作権の関係で表示できません。

著作権の関係で表示できません。

著作権の関係で表示できません。

著作権の関係で表示できません。

問 課題文の内容を参考にして「日本語らしい表現」をとりあげ、そこに表れている「日本人らしさ」について、あなたの考えを八〇〇字以内で論述しなさい。なお、とりあげる表現は課題文に見られるような「省略の表現」に限らなくてもよい。

(100点)

主題のねらい

今回の学習目的は「差異に目を向ける」である。

日本語のことだけを考えていても、何が「日本語らしい表現」なのかはわからず、日本語ではない他の言語と比較して初めて、日本語らしさとは何かがわかる。したがって、今回の出題のねらいは、「日本語と他の言語との差異に目を向ける」ことである。

こうした比較の手法は、何かの特徴について論述させるような他の問題にも応用できるので、しっかりと身につけてほしい。

課題文について

出典 金田一春彦『日本語の特質』（NHKブックス 一九九一年）

金田一春彦（一九一三～二〇〇四）は、日本の言語学者・国語学者。課題文中に出てくる父親の「金田一京助」もアイヌ語研究の本格的創始者として著名な言語学者で、民俗学者。

筆者は、国語辞典などの編纂や、方言のアクセント研究で知られたが、論文や専門書籍だけでなく、テレビや雑誌等を通じて多くの人々に日本語への関心と理解をうながしたことが、最大の功績と言える。

『日本語の特質』は、テレビの大学講座の視聴者向けに書かれたもので、日本語や漢字の特徴をわかりやすく解説している。執筆年度は古いですが、本書中の文章が高校の国語総合の教科書に長年掲載されるなど、国語学や言語学の入門書として定評がある。

概要

課題文は約三七〇〇字ある長文だが、ほとんどが具体例であり、筆者の主張がまとまって述べられているところは少ない。

このようなタイプの文章の趣旨を読み取る場合は、示された具体例によって筆者が何を言おうとしているのかを的確につかむ必要がある。そこで最初に、それぞれの具体例が何を言おうとしているのかを簡潔にまとめておこう。

① 山下秀雄『日本語のこころ』に出てくる、日本語を学ぶアメリカ人の受け答えの例

……文法的には間違っていない日本語でも、場合によっては不都合なことがある。日本語のこうした標準的な言い方を外国人が理解するのは難しい。

② 「はじめてお目にかかります」というあいさつの例

……日本語には言外の意味が存在する。

③ 「そこには誰もいなかった」の、ドイツ語との比較の例

……論理的に正確な表現ではなくても、日本人は違和感をもたない。

④ 電話での「田中ですけれども」の例

……省略した表現のほうが丁寧な言い方とされる。

⑤ 「私、知らないんです」の例

……全部を言わず、言外に意味をこめることで、相手に与える印象がよくなる。

⑥ 島崎藤村『千曲川旅情の歌』の英訳の例

……日本語は打消し表現が多いため、そのまま英訳するとアメリカ人には何も語られていない印象を与えるが、日本人は打消しされたところから想像力が働く。

⑦ 明治時代の軍歌の例

……打消し表現が連続する表現は、日本語にたくさんある。

⑧ 「ぼつぼつ」「そろそろ」という表現の例

……日本人は、互いにカンをはたらかせながら生活している。

⑨ 卵のゆで方を「適当に」と指定する例

……アメリカ人は客観的な「時間」という基準で機械的に判断するが、日本人は相手の態度を見て察する。

⑩ タイの給仕の少年の例

……相手の要求を察しようとする気持ちは日本だけでなく、東アジア全体に見られる。

以上から、筆者の主張を一文で要約すると次のようになる。

日本語には省略や打消し表現が多く、欧米の言葉のような論理性には欠けるが、アジアに共通する（相手を察する気持ち）によって成立している。

なお、筆者は（タイ・インドネシア・ネパール・スリランカ）をまとめて「東アジア」としているが、ここでいう「東アジア」は、（アジアを大きく二分した場合の東半分）程度の意味だと考えておけばよい。現在、一般的には、（タイ・インドネシア）は「東南アジア」、（ネパール・スリランカ）は「南アジア」に属するとされ、「東アジア」

ア」は（日本・韓国・北朝鮮・中国・モンゴル）などのことをいう。参考までに、本書の最後では、本書のまとめとして筆者自身が次のように述べているので紹介する。

これまで私は日本語についていろいろお話ししてきました。発音の面では音節の種類が少なく同音語が多いこと、文法の面では人称や数などはつきり言わず、大ざっぱな漠然とした表現が多いこと。それはこういう日本語の表現は、相手の勘にたよることが多い言葉だということを意味しますが、これが日本語全般に亘る特色とすることができません。

解答への道筋

改めて、問題の要求を確認しておこう。

- ・ 課題文の内容を参考にする。
- ・ 「日本語らしい表現」をとりあげる。それは「省略の表現」に限らなくともよい。
- ・ そこに表れている「日本人らしさ」について、あなたの考えを書こう。
- ・ 八〇〇字以内で書く。

これらの条件を落とさないように気をつけながら、以下の手順で解答に迫ろう。

1 課題文の内容を参考にする

「課題文の内容を参考にして」といった条件はよくみられるものだが、どのように「参考に」すればよいのかと、迷う人もまだいるかもしれない。

一般的には、〈課題文と関係のある内容〉を記せばよいのだが、どのような〈関係〉なのか考えにくい場合には、次の二つの方向で検討してみるとよい。

- ① 〈課題文（＝筆者の主張）に賛同する立場〉
- ② 〈課題文（＝筆者の主張）を批判する立場〉

①の場合、筆者の主張と基本的に同じような方向性で論じるとしても、課題文の内容にひきずられないようにすることが大切である。課題文と同じような内容を書くのではなく、自身の視点からみた、独自の文章による答案を作成してほしい。

②のように課題文に対して批判的な立場で書く場合には、読み手が納得するだけの反証（反論にふさわしい論拠）を用意することが必要である。

2 「日本語らしい表現」をとりあげる

あなたがもし、英語の授業などで、〈日本語ならこういえばすむことなのに〉といった感想をもった経験があれば、それが〈日本語らしさ〉である可能性が高い。

課題文には、単語レベルの例、慣用表現レベルの例、そのほか語法・文法レベル、発想レベルでの例が挙げられていた。それらをヒントに、自分自身でどのような新たな具体例をとりあげることができただろうか。

たとえば、次のようなものを取りあげれば十分である。

単語レベルの例

・「わびさび・もつたいない・せつない・がんばれ」など

慣用表現レベルの例

・「お世話になります・よろしくお願ひします・負けるが勝ち・足が地につかない・胃に穴があく・泣き寝入りする」など

語法・文法・発想レベルの例

・主語がなくてもよい
 ・一人称が多い（「わたし・わたくし・あたし・自分・ぼく・おれ」など）
 ・「一人、二台、三本、四冊」など、数える対象によって助数詞が異なる

・オノマトベが多い（「どつきり・ドカン・シーン」など）
 ・畳語が多い（「さまざま・はらはら・細々」など）
 ・漢字、ひらがな、カタカナ、数字、アルファベットを混在して書ける（「国産Yシャツ1着99円」など）

このような〈言語的な特性〉は、生活習慣に根ざしていることが多いので、日常的に自らの言語生活を見つめる意識をもちたい。

3 あなたの考える「日本人らしさ」について書く

あなたがとりあげた具体的な言語現象は、いろいろな意味で「日本人らしさ」を示していると主張できるはずである。(勤勉・謙虚・誠実・消極的・集団主義的……) などなど、日本人について世間でよくいわれているさまざまな評価については、あなたもいくつか知っているだろう。それらを参考にして、あなたが挙げた「日本語らしい表現」からは、どのような日本人の姿が見えるのかを論じればよい。

あるいは、あなたの挙げた具体例は、一般に「日本人らしさ」といわれていることとは逆の特質を示していると主張できるかもしれない。もしそうなら、それを論拠にして、「日本人は……といわれているが、はたしてそうだろうか、実はそんなことはない」のように、一般論に疑義をはさんで批判的な持論を述べることも可能である。

さらに、あなたが挙げた具体例に近い現象は英語やその他の外国語にもあることを述べ、それを論拠に(一般的に喧伝けんでんされている「日本人らしさ」などは実際には存在しない幻想であり、あるのは個々人の特徴だけである)といった、総論的な(日本人論)や(文化論)そのものに対する批判も可能だろう。

いずれの方向で論じるにせよ、ふだんの生活の中で「日本人らしさ」に関係するキーワード(つまり、日本人論に関する知識)を十分に蓄え、論拠として自在に使えるように準備をしておきたい。それらの知識は、今後あなたが社会や世界で活躍するときに、大きな力となるはずである。

構成を整える

制限字数が「八〇〇字以内」とやや長めなので、四〜六段落程度でまとめるとよい。解答例の例1は四段落構成、例2は五段落構成とした。

例1は、第一段落で、「日本語らしい表現」の具体例をとりあげ、それが一部の外国人から批判的な評価を生んでいるらしいことを示した。第二段落では、そのような「日本人らしさ」が生まれた理由を考察し、第三段落では、この「日本人らしさ」は現代でも長所となるはずだが、多くの日本人にその自覚がないことを、議論すべき論点として挙げた。そして第四段落では、今後の国際関係の中では、その自覚をもって理想的な未来の創造に貢献すべきことを主張とした。

例2も、第一段落で「日本語らしい表現」の具体例を挙げたが、直後の第二・三段落では自身の経験を論拠に、その例に対する反証を提示し、第四段落では、同質の人間が閉鎖的な空間で生きてきた日本人と、他者を征服しながら生きてきた民族との違いを述べた。そして最後の第五段落では、現在の地球がかつての日本のように狭小化しつつあることを指摘し、今後の国際社会では「日本人らしさ」が重要な役割を示すであろうことを示唆して主張としている。

設問は(「日本人らしさ」について述べなさい)とあるだけだが、解答例はいずれも、単なる「日本人らしさ」の指摘を超えて、(今後日本人としてどのような生き方をすべきか)の考察にまで踏み込んでいる。やりすぎは危険だが、こうした独自性を盛り込むことが、他の多くの答案との「差異」につながる。

例1

英語では「I read the book.」、漢文では「我読其書。」のように、主部の次に述部を置くが、日本語では「私はその本を読みます。」のように述部は文末に置かれる。つまり、英語や漢文が早めに話者の立場を明確に相手に伝えるのに対し、日本語の場合は最後まで聞かなければ話者の意思や立場がはっきりしない。こうした日本語の特徴を活用すると、自分の意見を述べながら、聞いている相手の顔色やその場の雰囲気を慎重に読み、最終的に結論を「読みます。」から「読みません。」に変更する、といったことも可能である。こうした日本語の特徴は、先に自分の立場を明確に示す文化と比べると信用できないものに見えると思うが、はたしてそうだろうか。

日本人は、古くから「イエ」や「ムラ」といった小さな共同体の中で生きてきた。そのような日本人にとって最大の恐怖は、その共同体の中から外に放り出されることだったはずだ。共同体に属することが自らのアイデンティティである世界においては、共同体からの追放は精神的・肉体的な死を意味するからである。共同体の仲間から外されないためには、周囲の様子をよく観察し、集団内の和を乱さないよう慎重に自分の態度を決めなければならない。そうして、日本人は互いに協力しあい、平和な共同体を維持することに努めてきたのである。

このように自分以外の他者に配慮しながら生きる日本人の特性は、地球という限られた空間の中で、さまざまな人種と交渉しながら生きざるを得ない現代においても、長所となるはずである。ただ、多くの日本人には、その自覚がな

▲思考の流れ

← 文の中での述部の位置をとりあげるところからスタートする。

← 《日本語らしい表現》の例示
述部が文末にくる日本語の構文は、先に述部を明示する言語を使う人々からすると違和感があるらしい。

← 《日本人らしさ》の考察
日本人は小さな共同体で生きてきたために、相手に対する配慮が発達したのだろう。

← 《論点》
こうした他者への配慮は長所であるが、日本人がそれを感じていないことが問題である。

いことが問題なのではないか。

今後の国際関係において我々は、日本人とは異なる文化に育った人々の存在を十分に認識した上で、「日本人らしさ」にさらに磨きをかけ、人々の関係の調整役を引き受けるべきである。その行動を通して、よりよい未来の建設に貢献することが可能であると考える。

(一行二〇字詰換算 八〇〇字)

《主張》

今後の国際関係の中では、他者に配慮できる「日本人らしさ」が、世界の人間関係の調整役として有意義なものとなる。

例2

日本人に「コーヒーをもう一杯、どうですか?」と尋ねると、「あ、いいです」と答える人が多い。英語話者はこの「いいです」を“good”の意味だと考え、つい“yes”だと思ってしまうが、実はこれは“No”の意味であり、こうしたあいまいな表現をするのが「日本人らしさ」だというのが、本当だろうか。

この疑問は、時々短期留学でやってきた海外の高校生と話したわずかな経験から感じただけのことだが、たとえ英語話者であっても、同じ状況でいきなり“No”と明確に断る人はまれで、むしろ“I’m OK. Thanks.”といった断り方をする人のほうが普通だと思う。

考えてみれば、相手がほぼ初対面で、しかもほとんど共通の言語をもっていない場合には、余計なことを言ってしまうかたがないので、“Yes”か“No”という端的な答えしか提示しないことになるだろう。「日本人はイエスマンだ」と言われた時代があるが、かつての日本人と外国人の関係はまさにそうだったのではないか。だが、そこに多少なりとも交友関係が成立してくれば、相手の気持ちを考えて、穏やかに応対するのが当然だろう。つまり、日本人らしさとは、あいまいさではなく、穏やかさなのである。

日本は歴史的に長い期間、比較的同質の人間たちが、島国という閉鎖的な空間で共存してきたために、他者への穏やかな配慮が発達したのだろう。一方、近年まで他者の土地を征服しながら自分の領土としてきた民族にとって、明確な自己主張は自分の身を守るための手段でもあるため、配慮よりも対決姿勢を選択しやすかったと思われる。

しかし、交通網や情報網が高度に発達し、人口も爆発的に増え続ける現在の地球は、かつての日本と同じような閉鎖的状况になりつつある。他者への配慮

▲思考の流れ

◀否定的な意味の「いいです」をとりあげるところからスタートする。

◀「日本語らしい表現」の例示
「いいです」というあいまいな否定的表現は日本的だ、という話をよく聞へ。

◀「自分の体験による反証」
英語話者であっても、明確にNo.と断る人はまれではないか。

◀「反証の論拠」
多少なりとも交友関係が成立していれば、相手の気持ちを考えて遠回しに否定することが当然の態度であり、日本人らしさとはあいまいさではなく、穏やかさのことである。

◀「日本人らしさ」の考察
日本人は歴史的に長期間閉鎖的な空間で生活してきたために、他者への穏やかな配慮を発達させた。



がなければ、結局はお互いに不利益を被ることになるのである。こうした状況においては、一足早く他者との共存の大切さを自覚した日本人こそが、広く世界で活躍できるのではないかと私は考える。(一行二〇字詰換算 八〇〇字)

←

《論点↓主張》
こうした「日本人らしい」配慮は、今後の国際関係に重要である。

深掘り解説

ここでは、毎回のテーマについてももう一步「深掘り」して考えるためのポイントを取り上げます。今後の「種」として考えてください。

■比較言語学と日本語

一般に、(人は言語によって思考し、その思考に基づいて判断し、行動する)という認識があるためか、言語の研究から人間に迫ろうとする学問が昔から盛んである。中でも、諸言語を比較することで同系性や親縁性を見出したり、共通の祖語の再構築を図ろうとしたりする「比較言語学」は人気がある(複数言語を比較する研究でも、歴史的な関係の解明を目的としない場合は「対照言語学」と呼ばれる)。

日本国内には、日本語話者がそのままでは会話できない言語として、北海道のアイヌ語や南西諸島方面の琉球諸語などがある。また、隣の朝鮮半島や中国大陸に散在する諸言語の話者とも会話ができない。

これらのうち、琉球諸語については、比較言語学的に日本語との親縁性が認められ、「日本語族」の一つとする説が有力である(琉球諸語は日本語の方言とされる)。

しかし、そのほかの言語と日本語族との親縁性については、日本語・朝鮮語などを「ウラル・アルタイ語族」として分類する説もあるものの、現在のところ説得力をもって証明することが困難で、日本語族は他の言語との系統関係が明らかではない「孤立言語」の一つと考えるのが一般的である。

今後は、遺伝子学など他の学問との協同研究によって、日本語と他言語との親縁性が明らかになることが期待されている。

■日本論の特殊性

日本の書店には、日本文化論や日本人論に関する書物がたくさん並んでおり、日本人以外の著者による日本論も大量に読まれている。つまり日本人は、他国人から自身がどのように見られているかに、とても関心があるといえる。

ところがアメリカでは、アメリカ人自身が書いたものはもちろん外人が書いたものも含めて、アメリカ論などはほとんど読まれないし、ろくに売られてもないという。アメリカ人は、他国人からどのように見られているかなどには関心が薄いらしい。

このように、(国によって異なる現象)というものは確かに存在するため、(日本の文化は特殊である)という命題は真である。だが、同時に(世界中の文化はそれぞれすべて特殊)であり、日本だけが特殊なのではない。(各々の文化は特殊であることが普遍的)なのである。ただ、(日本人は、日本の特殊性をことさらに主張したがるところに特殊性がある)ということはいえるかもしれない。

(日本の特殊性)といわれる現象をよく観察すると、日本には特殊な面ももちろんあるが、他文化や他国家と共通していることも多い。つまり、日本の特殊性は、他の国の特殊性と似たところもあれば似ていない面もあるのだが、日本論は一般的に相違点ばかり重点をおき、類似点を無視する傾向がある。そのほうが読者は喜ぶのかもしれないが、その結果、日本は他文化・他国家と実質以上に異なっているように思いこみがちである。我々は、そのことをしっかりと認識しておく必要がある。

Z1AAA-2101

Z1AAA-2101

総得点 62 /100

問

日本語の文章の中でよく目にする表現に、
「〜である」と思われる。これらの表現はいわ
ゆる自発の助動詞「れる」「られる」を用い
たものだが、評価も自然の成り行きに任せて
いるような「はつきりと断定をしない言い方
である。このように自ら言い切ることも避け
て、読者や他者に最終判断をゆだねる態度は
はたして良いものなのだろうか。日本人はこ
うした表現を自ら好んで使い、またこのよう
に直言を避ける言い方こそ、問題を荒らげな
い最適な表現であるといつ認識をもつ。こう
した言葉のあいまいさを日本人が伝統的に
むここの背景には、日本人独特の「個」に
する意識があるのではなからうか。
言葉の「個」に對する意識とは、次のような
背景の「個」に對する意識とは、次のような
ものだ。欧米の個人主義において個人は一個
の独立した存在であり、社会の中で自己の主
張を述べて自己の存在を確立するためには、
つねには「きりとした物言いが要求される。
しかし、日本人の場合、個人は共同体の構成
員としての意識が強く、共同体としての「和
」の実現が個人よりも優先される。それゆえ
に日本人は、個の主張をあいまいにすることに
で摩擦をなくし、共同体としての「和」の維
持を図ろうとする。日本の社会は閉鎖的であ
るといふ批判を欧米諸国からしばしば受ける
が、これからは日本という小さな共同体を守
るだけの姿勢ではいけないのである。

要 求	65
表 現	
表 記	3
得 点	62
	/100

1	課題文読解力				
2	資料・図・表の読み取り				
3	課題文の要約力				
4	テーマの整理				
5	論点の一貫性	B	C	B	
6	文章表現力				
7	論理的思考力				
8	読解力				
9	意見の独自性				
10	発表条件遵守等				
11	表記の正確さ				
12	タイトルのつけ方				
A	すばらしい出来である				
B	よくできている				
C	もう少し出来である				
D	相当努力を要する				

この部分は前段落末尾の内
容をくり返しているだけなの
で、カットして「欧米の個人主義
において「〜」から事を出してよ
い。」で

原稿用紙で閉じカッコ()
が行頭にくることは避けて、
前行の最後のマス目に文字
と同居させるか、前行末の
マス目の外に書く。
①表記で

なぜ「〜」した姿勢を避けるべき
なのか、論拠が明確でない。入
断定を避ける言い方とする理由
を述べる第二段落の論旨に合
わぬ。②で
カットするか、第三段落で論点を
をまとめた結論として、今後「
した」日本人的「〜」は必ずあるべき
か、を発展的に述べるべき。

「〜」られるという表現から断定
を避ける日本人の傾向について述べて
いるのはよいが、「はたして良いものなの
だろうか」という問題提起は論の内容
に合わないものとなっている。②で
この部分はカットして、第一段落は日本語
の特徴とそこから読み取れる日本人の心性
の提示(主眼にあたる部分)のみで、まとの
第二段落の論拠につなげるべき。

次の段落で欧米の個人主義と対比して
論じているので、「和」に對する意識、
などのほうがより適切である。③注

誤字、確立が正しい。①表記で

誤字、「摩擦」が正しい。①表記で

②合指り

①出指り

(※解答欄は裏面に続きます)

